

宮城県美術館 現地存続運動の経験

2025年8月26日

宮城県美ネット／西大立目 祥子・高橋直子
(聞き手／阿部重憲)





宮城県美術館移転問題とは

●2019年11月、県が突然3施設の集約移転を発表

宮城県民会館・宮城県美術館・
みやぎNPOプラザ

11月16日 河北新報の報道▶

11月18日 知事が定例記者会見で発表

●2020年11月16日、県が 宮城県美術館の移転集約案を撤回



◀撤回を
報じる各紙



①現地存続運動の経緯

●「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク（県美ネット）」結成まで

- ・「まち遺産ネット仙台」の活動＝初動
- ・人的ネットワークを活かす
- ・コロナ下、県美ネット結成に向けて

●運動の急速な広がり

- ・県美ネット結成
- ・事務局体制
- ・増える会員

●最初の運動主体＝まち遺産ネット仙台・（アリスの庭クラブ）
県の発表の3週間後に要望書を提出し、
12月末に最初の集会を主催



●2019年12月10日、
まち遺産ネット仙台、日本
建築学会東北支部から要望
書、意見書を提出

●7団体が要望書を提出した

▲「宮城県美術館の話をしよう その1」
100名参加

「宮城県美術館の話をしよう その2」 ▶
91名参加



2020年7月21日、「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」設立



設立総会▶

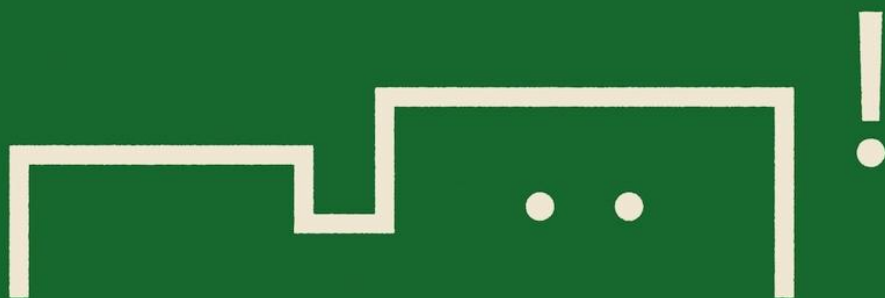
新組織を模索し、県に対し要望書を提出した団体の有志で結成

「現地存続」一点でつながる

- ・ 会員募集を開始
(一口／1000円)
- ・ 顧問には、建築家、大学関係者、美術家などの専門家を擁した



SAVE THE MIYAGI MUSEUM OF ART



#宮城県美術館の現地存続を求めます

2019年秋、宮城県美術館の移転プランが県から突然発表されました。まちづくり・美術・建築・決定プロセス、さまざまな観点からみて問題が多く、県内外から移転を疑問視する多くの声があがっています。今の美術館の豊かな自然に囲まれた立地、モダニズム建築の巨匠・前川國男による建築、そして、約40年に渡ってこの場所で育まれてきた芸術文化。移転すれば、立地も建物も、文化的な蓄積も断ち切られてしまいます。震災にも耐えた今の建物は、必要な改修をするだけで、今後50年は使える強固な建物です。さらに、改修は新築移転するよりも経済的です。そしてなにより、県民の声を無視した移転の決定プロセスは、とても納得できるものではありません。だから、私たちは現地存続を求めます。一緒に声をあげていきましょう。

「県美ネット」は、
中間組織として機能した

8月27日の記者会見後、
みるみる増加した会員数

月	個人	団体
8月	452	8
9月	1254	13
10月	1981	15
11月	2144	16
12月	2189	16

* 県が移転撤回を表明した11月には、2000名を突破

②見えてきた県の進め方の問題

●県のずさんな進め方

- ・県美の「リニューアル基本方針」を保留にし、新たな懇話会立ち上げ

●「文化」行政の実態、問題

- ・知事コメント「新しい美術館を県民は歓迎すると思っていた」
- ・県美をハコとしてとらえる意識

県の進め方の問題と背景にあったもの

●宮城県は2018年3月に県美を現地で増改築する「リニューアル基本方針」を策定。その方針はそのまま、2019年5月に「県有施設再編等の在り方検討懇話会」を立ち上げ。県所有の築30年以上の10施設をリストアップし、廃止や集約の検討を始めた。

●3施設の移転集約を議論した2回目と3回目の会議は非公開。県民もマスコミも入れず。議事録なし。委員には、美術系専門家が一人もいなかった。

■2014年、総務省が各自治体に「公共施設等総合管理計画」の策定を求める
→2016年に「宮城県公共施設等総合管理方針」を策定

■総務省は、自治体が事業を進めやすくするため「公共施設等適正管理推進事業債」を用意。県もこの事業債の「集約化・複合化」メニューを使おうとしていた。

条件▶①延べ床面積を、前の建物の合計よりも減らすこと。

②前の建物を廃止するか解体すること。

撤回後の知事コメント

- ・この案を出したときに、恐らく多くの県民の方に喜んでいただけたら、大変厳しいご批判が出たということです。

- ・なるほどなと思ったことが3つございました。

1点目は、この美術館の美術的な価値というのを見落としていました。前川國男さんという日本では大変な有名な建築家が設計をされた建物で、あの美術館や自体が一つの美術館といえるという声です。

- ・2つ目は川内の価値です。まさに東北の、宮城県の中心地と言っても過言ではなくて、非常に文化的な意味合いがある場所である。

- ・3つ目は専門家の先生によると、この美術館は大変素晴らしい駆体で出来上がっているので100年持つということでした。

③宮城県美と県民のかかわり

●美術館と県民の豊かな関係

（出前講座や投書から教えられたこと）

- ・ 県民にとっての県美の価値
- ・ 川内にあることの価値
- ・ 県民ひとりひとりの思い出の場所
- ・ 創作室が育んだもの（開かれた美術館）

→現在の県美は？かつてのような役割を果たしているか？

県内17カ所での「出前講座」の開催

古川・加美・鳴子・栗原・柴田・白石・丸森・塩竈・亘理・石巻・登米・岩沼
宮城野区・青葉区・泉区・若林区・太白区・その他依頼13カ所

- ・ 集約移転案の問題点を整理して伝える
- ・ 終了後に県美ネットの会員募集
- ・ その地区選出の県会議員に出席を依頼。住民の生の声を聞いてもらう

宮城県美術館への
思いを聞く場に

河北新報紙上にも、連日のように、美術館についての投書



▶ 加美町で。膝詰めの話し合い
(2020年8月29日夜)

④ 専門家とのネットワーク

● 緊密なネットワークが、次の行動の力に

- ・ 美術家／県美の物語（歴史）を知る
- ・ 建築家／建物の優れた機能を知る
- ・ 元学芸員／使う側からみた県美の優位性
彫刻をはじめ作品についての知識

建物探訪会やシンポジウムを開催



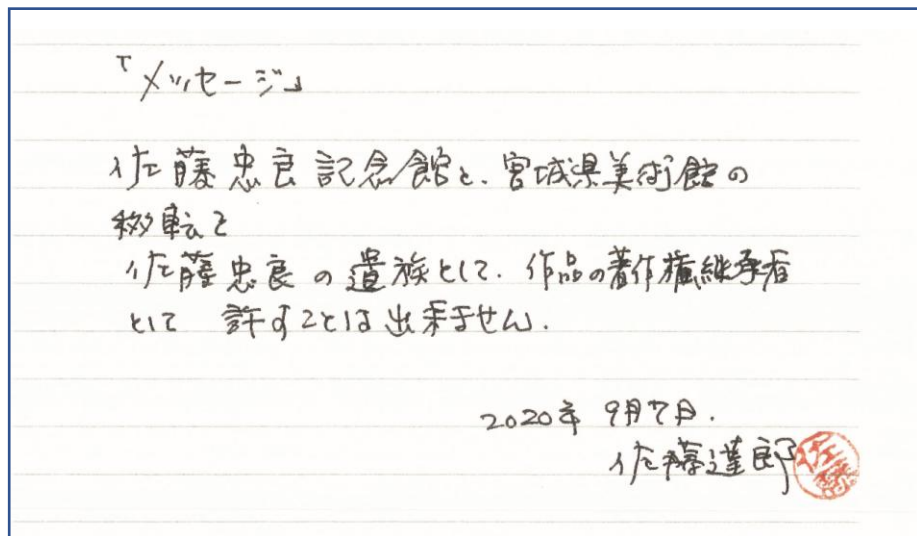
▲プレキャストパネルをはじめ、建築的価値について知る機会になった。

◀佐藤忠良記念館を設計した大宇根氏による建物解説講座も開催。
(2020年9月)

▼顧問が登壇するシンポジウムを開催。(2020年9月)



環境彫刻家ダニ・カラヴァン氏、新宮晋氏、 佐藤忠良氏ご家族からメッセージを受け取る



▲佐藤達郎氏より

「マアヤン」「時の旅人」は、環境と
一体化した「Site-specific Art」
この場所から動かすことはできない

佐藤忠良記念館は、作家の意向を汲み取り
つくられた



▲ダニ・カラヴァン氏より

●10月29日、宮城県に対し、メッセージとともに公開質問状を提出

⑤美術館（場・存在）としての価値を育む

●美術館（公共施設）とは？

- ・ 公共＝みんなのもの
→市民にできることは何か？
- ・ 市民からのアプローチは必要
- ・ かかわりを深めることで開かれた場に
- ・ 美術館の新たな役割を発見する
→建築家・専門家の役割とは何か？
- ・ スクラップ&ビルド（造って壊すは反文化）

「共有財産」としての公共施設

共有財産＝みんなのもの

その地域に暮らす市民にとって必要な場。
そこに暮らす市民によって発案され、立てられ、使われ、維持されるべきもの。

文化施設のものがたりを市民が伝えていくことも大切

自治体の財源不足の中で、これまで維持されてきた共有財産が危機にあるのではないか？

山、森、川、水、公共施設、公園の運営などに、企業の論理が持ち込まれようとしている。→「にぎわい創出」が目的にされる。

2020年11月16日、 宮城県は集約移転案を撤回した



● ライフサイクルコスト比較

▶ A案（集約・複合化）
780億円

▶ B案（現地・増築）
840億円

▶ C案（現地・増築なし）
770億円

私たちの「公共」＝宮城県美術館

宮城県美術館には、人々の個人史が折り重なる

▶多くの人が個人的体験をととして美術館への思いを語った

・美術館で育った・庭で子育てした・子どもの絵を見に家族で出かけた・
県民ギャラリーで開催の高校美術展に出品した・亡き夫と絵を見にきた・
創作室で作品をつくった・カフェで友人とお茶を飲むのが楽しみ

人々は直感的に、この建物の居心地の良さを感じ
とっている

▶この運動とは
何だったのか？

- 【環境・建築】川内の自然環境と一体になった前川國男設計の建物
- 【体験・記憶】大切な記憶と体験
- 【美術】常設展・企画展
- 【教育】社会教育の機能、学校教育との連携

- ・私にとっての大切な経験、大切な場所を乱暴に扱わないでほしい
- ・私の経験は、誰かの経験につながっていく＝みんなのもの

建物には物語がある

建物は建てられて完結するのではなく、その地に暮らす人々が使い、訪れ、つまり生きられていくものなのでは？

そこに物語が生まれる。しかし、物語は忘れられていく

建物の物語を、市民が伝え再生していくことが必要

▶この運動とは
何だったのか？

- ・市民は建物についての個人的な経験をもっと発言してよい
- ・これからの運動につなぐための運動

